

山と博物館

第29巻 第6号

1984年6月25日

大町山岳博物館



大町市平野口大出「西正院」の大姥尊像 撮影 山本携挙

夏山を迎えるにあたって

今冬の記録破りの豪雪は、残雪の「雪形」にも異変をもたらしている。

博物館に対峙して聳立する双耳峰、鹿島槍ヶ岳にでる、安曇野に向って翔る、吼えるが如き「獅子」の姿も、一ヶ月おそく出現し、今もまだ去りやらず、対面していまにも舞い上らんとする優雅な「鶴」もまた飛び立ちきれないでいる。

爺ヶ岳の「お爺さん」も、多量の残雪と気節はずれの春の降雪に、何回となく見え隠れしていた、いまだにはつきりと、種蒔の姿勢になれないで、水田転換、減反を奨励していたのに、最近また米不足だという、農業政策の不信からか、太古以来山麓の人々に農作業の時期を教え続けてきた、お爺さんも、途惑い、思案にくれているかのようだ。

北アルプス地方も梅雨に入ったという、うっとしい梅雨があれば、鹿島の「獅子」も羽け去り、「鶴」も北へ帰り、「お爺さん」も来春まで別れを告げている。そして夏山も本格的なシーズンとなる。

昨夏県下の山岳で、九人が死亡し、二十三人がけがをした。登山の大衆化が進み、北アルプス北部地区だけでも二十万人余りが入山し、遭難事故もまた増加の一途をたどっている。

その事故内容も、遭対協常駐隊員等が口をそろえて「山の常識では考えられない」と初歩的な事故が増えている。

幼児連れで、寒さにふるえ動けなくなった家族、高令者で歩行不能になったものや、多様化している登山者に、自然や山岳の気象の厳しさや、体力、装備等等入山前の「心の備え」について、もっと幅広く普及するよう啓蒙運動が必要だ。

今年に国立公園指定五十周年、自然保護憲章制定十周年と環境保全に関して、記念行事なども盛たくさんではあるが、

“自然をとうとび、自然を愛し、自然に親しもう、美しい自然、大切な自然を永く子孫に伝えよう”、という自然保護憲章は、国民が国民の名において制定したもので、理念ではなく、実践してほしいと思う。

(山岳博物館協議会委員 武田武)

西正院の大姥尊像

遠藤和子

(一)

アルペルトが開通された五月六日。高橋大町市長がふんする佐々成政と、その一行が、立山の室堂でアルプス越えの出陣式を終えて黒部ダム上に進んでくると、勇壮な泉嶽太鼓が打ち鳴らされ、「大出村百姓」の旗を掲げた村人が五名。ダム駅方向からやってきた。「この雪の中を、ご苦労でこわした。大出では村の衆が、佐々成政さまのくるのを今か今かと待っていたに。ご案内しあす」

こうして成政一行は、村人らの先導でアルペルトを通り、野口区大出に向かった。大出の大姥堂境内では、野口区の男衆が成



カーニバルの佐々成政一行を迎える大出百姓たち

大姥堂の本尊、大姥尊像は、カーニバルで再現されたように、天正十二年(一五八四)の厳冬期に、佐々成政が佐良山良越えの際、道中安全を願って立山仲宮寺より貰い受け、従者に背負わせてきたものであるという話は、大町市のみならず、富山県でも伝えられてきている。「大姥堂縁起」によれば、延暦寺の開祖、伝教大師が刻まれたものであるという。

政一行を待ち受け、女衆は甘酒づくりや干魚を焼くなど、接待の準備に余念がなかった。そこへ到着した成政主従は、村人らの先導で無事に山越えできたお礼に金子を奉納し、武運長久を祈った。その後、村人に、道中安全のために同道してもらった大姥尊像(表紙写真参照)を、村の守り本尊として祭つてくれるように頼んだ。

これに対して、大姥堂保存会長、遠山氏が「私も百姓、末長く祭り申し上げます」と約束し、一行の道中無事を祈った。

一切の儀式が済み、村人らから酒や甘酒、焼き餅などをふるまわれて元氣を取り戻した成政主従は、浜松城の徳川家康に会うべく、再び列を組むと旅立っていった。

形式的なショーでもなければ、セレモニーでもない。その昔、越中国守、佐々成政主従と野口村の人びととの間で繰り広げられたに違いない心の通い合った情景の再現で、観る者をして、胸を熱くせずにはいられないシーンであった。しかも、このカーニバルが、野口区の人びとの自主的発露による参加と知り、感動は更に高まった。

すなわち、第五十一代、平城天皇の大同年間(806-809)大師が越中国立山を開くために法華経を誦読された結願の日、大姥尊が現れ、「吾、ここに汝を待つこと年久し。吾はこれ一切、有情延命守護の大姥なり。汝、吾容像を、この地に留め、あまねく信仰する者の表徴とせよ」

と告げ、消え去ったという。

そこで大師が、拝した尊像を刻んだもので、釈迦の弟子、鬼子母神にたとえてあるという。したがって、「大姥御和讃」に

命頂礼大姥尊、本地を悉く尋ねれば、子安地藏の化現にて、仮りに老女と身を変じ一切有情を救わんと、伝教大師の御手づから刻ませ給へる像にして、靈驗殊勝にましませば、悪風悪雨悪疫に、悪蛇悪蝎害するも、慈悲の乳酪を与ふべし(後略)

とあり、子どもの病氣、夜なき病などに靈驗あらたかであることをうたっている。

(三)

一方、成政に与えたとされる立山仲宮寺のあった芦峯寺における姥信仰は、大出の大姥信仰とは異なっている。

立山信仰の基地であった芦峯寺には、明治の廃仏しやくまで姥堂があり、堂内に、姥三尊と日本六十六州をかたどって六十六体の姥尊が祭られていた。

この姥堂、姥尊の「姥」という字は、立山雄山神社宮司、佐伯幸長氏によれば、優婆、祖母、老婆、媼、御姥とも書かれているが、正式には「媼」で、芦峯寺、岩峯寺の「峯」と共に、大辞書にも見当たらない立山信仰独自の造り字であるという。

媼三尊は、「芦峯中宮御媼縁起」では、大日如来、弥陀如来、釈迦如来とされている。また「媼堂秘密口伝」には、

「造化の三神女性を以て、立山に出現あり、天地万物の母体の徳を現し、寿命長久、五穀豊穰、子孫繁昌、諸願満足の誓を立て給ふに、よって、媼の御字を以てして姥尊と崇め奉る」

とあり、殊更に三体の本地仏の名を示さず、「本地を尋れば、大日如来の普現色身也」としている。

これは「立山略縁起」も同様で、「大日岳に天降った姥尊は、衣食の道を天下に広める大業を成しとげた後は、あの世にいつて生死をつかさどる神となった」とし、冥府の神であることから、三途川の脱衣婆のような形体に造られている。

この姥尊を祭った姥堂では、毎年秋の彼岸中日に、芦峯寺年中行事最大の「布橋大灌頂法要」が行われている。これは、女人禁制であった立山登拝の中で女人救済のための擬死再生儀式であった。

全国からやってきた女人たちは死に装束をし、エンマ堂でエンマ大王の裁きを受けた後、白布で目隠しされ、僧徒らの先導で雅楽が奏される中を法華経を唱えながら布橋(白布が敷きつめてある橋)を渡り、姥堂入りをする。姥堂は、四圍が閉め切られて暗黒の死界。その中で大法要が行われ、女人たちが称名念仏を唱えて心が清浄になったとき、さつと堂の東方正面の板戸が開かれる。

そこに見えるのは、夕陽に輝く立山連峰の雄姿。女人たちは感嘆の声を上げ、浄土に到達したような思いに至る。

こうした宗教儀式について、佐伯幸長氏は、「女人も罪障消滅し、極楽往生できることを天下に宣布布教した大秘事。全国の神社仏閣、数多い靈山靈所にも比類されるものがない程、立山が誇る独特の姥信仰行事」と、語っていられる。

また、立山信仰研究者、広瀬誠氏は、「姥尊は、日本神話のイザナミノミコトに似た女神。女人たちも、姥堂での供養をすますと生まれ変わり、清められて再生し、不老長生が得られるという意味もあった」と、

(四)

こうして擬死再生儀式は、いつごろから行

れていたであろうか。

現在、芦峠寺に残る姥尊像の一体に

「永和元年十二月 日 式部阿闍梨」

という墨書銘があり、文正元年には、当時越中守護代であった神保長誠が、姥堂、地藏堂、エンマ堂の造営に拾貫文を寄進している。

富山大学名誉教授、高瀬重雄氏は、「永和元年(一三三五)に姥尊像があり、文正元年(一四六六)には、規模は小さくとも宗教儀式がなされてきたとみるべきだ」と、説かれている。

佐々成政は、天正九年(一五八一)に越中国守となり、天正十二年(一五八四)十一月には、立山仲宮寺を「守護不入の聖地」として尊崇し、堂塔の造営、仏供燈明をあげるための寄進をしている。

天正十二年十一月といえ、佐良佐良越えの直前。「甫庵太閤記」や伝えによれば、表面きは病氣ということにして、秘かに富山城を發つて芦峠寺にいき、ここで家臣らに、佐良佐良越えを打ち明けたという。奇進状には、「大日如来の仏供燈明、毎日不可油断候」と記してあるが、留守中の国家安泰と、道中安全の祈願を示しているように思われる。

このとき、姥尊の一体を同道したという。成政が命がけのアルプス越えに、こいねがったのか。あるいは、仲宮寺の別当(代表者)日光坊が、国家の危機に際し、多大な寄進をなした国守への返礼と援助に与えたものか。

姥三尊と六十六体の姥像が安置され、布橋大灌頂法要儀式が盛大に行われたのは江戸時代。佐々成政のころには、すでに立山信仰が全国的に名をなしていたとはいえ、現存の姥尊像が、室町中期の永和元年の作成であるから姥三尊と六十六体は揃っていないからであるまいか。

しかも、成政が越中に入国前、越中の神社は一向宗、禪宗を問わず、大部分が越後の上杉謙信の度重なる侵攻で、焼失、破壊の被害を受けていたのである。

芦峠寺も、その難をまぬがれているはずがない。というのは、芦峠寺と深い関係にあった寺嶋職定の池田城(立山町)が、永禄十一年(一五六七)謙信の猛攻を受けて落城している。当然、池田城を援護していた芦峠寺も、上杉勢の矛先の前に壊滅に近い悲運に際会し、姥堂も被害を被っていたと考えられる。

したがって、成政が、姥堂を「守護不入の聖地」とし、多額の金子を寄進した代償として、焼け残った姥尊の一体を貰い受けたのではないだろうか。その姥尊像のお陰で、無事にアルプス越えできたことが、一層、成政の姥信仰への念を厚くしたのである。

天正十四年(一五八六)八月二日。大阪城で出仕の日びを送っていた成政は、留守中の越中国の安泰を願ひ、芦峠寺の日光坊に対して土地や米を与え、祖母堂に燈明をあげることを命じている。その寄進状から、成政の姥堂への尊崇が並なみならぬことがうかがえる。

一、覚(芦峠祖母堂)

一、常燈毎月可改之事

一、正、五、九護摩 能化扶持方

一、本宮山子錢八貫文 日光坊可請取事

以上

米拾式俵者 十二ヶ月分 能化三人扶持

米拾八俵者 十二ヶ月分 常燈

米拾俵者 護摩入用 合四拾俵者

天正拾四年八月二日

(佐々成政 黒印) 高月(印文) 日光坊

(五)

では、大出、大姥尊信仰と芦峠寺、姥信仰との違いは、どこからきているのだろうか。

立山信仰には、大出の大姥堂縁起と同様、伝教大師が刻まれて立山に安置され、それが立山開山だとする説もある。となると、成政は立山開山の祖を貰い受けたことになる。

これについて富山県の歴史家の中には、「いかなる国守とはいえ、芦峠寺信仰の中心であった姥尊を、一体なりとも渡したであろうか。ましてや、立山開山の祖を……」

とて、否定される。

また、富山県の歴史家たちの間で、信州側の立山信仰信者らが、表登山口の芦峠寺に対し、裏登山口として大出に姥堂を設け、姥像を安置したのではないかという説もある。

立山の背後を仰ぎ見る信州で、立山の後ろにそびえる山やまを後立山連峰と名付けた信州側の信者たち、その信者らが立山登拝をするとき、芦峠寺に立ち寄らず、大出―針ノ木峠―黒部川―立山への道すじは距離的に近い。

この道すじは、古くから信越間を行き来する商人たちの交易(塩の道)の短距離ルートとして利用されていた。信者らは、この道すじをたどつ

たわけで、このことは江戸後期、百井塘雨の「笈埃随筆」にも記されている。

こうした信州側の行動を、加賀藩は国境警備の点で、芦峠寺は自己存立の立場から「抜け参り」と称し、厳しく目を光らせていた。

このため信州側では、立山登拝の期間が過ぎた後に行動し、大出の姥信仰も、芦峠寺への遠慮から別説を取り上げたというのである。

この考え方からすると、大出の大姥尊像は、信州側の立山信仰信者らが、芦峠寺の立山仲宮寺に代わる大姥堂を設置したものの、芦峠寺の抗議をおもんばかり、佐々成政持参説を唱えたことになる。

佐々成政持参説については、確かな史料はないが、大姥堂前の松沢家に、四百年來伝えられている話がある。

それによると、松沢家の先祖がカシカ狐に出かけた山中で、成政一行を助けて大出に案内。一行を松沢家や村のいえに泊めて接待した。その際、成政より大姥尊像の守護を依頼され、以後元和三年(一六一七)村に寄進するまで守つていたという。

また、成政は大姥尊像だけでなく、佐々家の家宝「親鸞上人直筆」の軸を持参。それを凍傷の重かった近侍、松沢新助に授けた。新助は、小谷村来馬で病死したという。

調べると、来馬の西方堂に、上人直筆の軸が現存し、「西方堂由来記」が土地の松沢家に残されている。その由来記の内容と、大出、松沢家のいい伝えが一致するばかりか、両者とも、成政一行を助けたという三度栗を植え、松沢姓名乗りの由来も合致している。

四百年來、何の交渉もなかった大出と陸の孤島であった小谷村来馬とが、同じ内容のことを、いくつも伝え残しているのである。

民間の伝承が、史料、史実よりも、はるかに具体的に、真実味のあることから、大出、大姥尊像の佐々成政持参説を信じざるを得ないと思うのは、私の独断であろうか。

(作家・富山市千歳町)



大出百姓と取材中の筆者

野草シリーズ

野の花—薬草・毒草—

保 尊 裕 之

野草シリーズの第三回目として今回は此の辺にみられる野草で、薬用となるものと有毒で注意すべきものについて述べてみることにしたが紙面の都合でごく一部に限つてある。

一、薬草

- ・近頃の薬草ブームにより、化学薬品や抗生物質に加えて自然の薬草が見直されてきている。ここでは漢方のように何種かの薬種を調合するのでなく、素人が単味で使用しても薬効があり、安全で、利用し易いものいくつかを挙げてみることにする。(一)内は生薬名。
- ・アオツラフジ(木防己)利尿消炎に木部や根を利用する。北部の多雪地には少ない。
- ・アカネ(茜草根)至る所の藪などからまつている。根を止血、口内炎に用いる。
- ・アキカラマツ(高遠草)山麓などに多い。茎葉を健胃剤とする。打撲にもよい。
- ・アマドコロ(萎蕤)地下茎を滋養強壮に用いる。また打撲にも効く。山菜にもなる。
- ・イカリソウ(淫羊藿)紅紫の花のもの以外



ドクゼリ

・クズ(葛根・葛花)根は風邪に花は二日酔によい。根より本物のクズ粉がとれる。

・サラシナシヨウマ(升麻)この辺に多い。根茎を発汗解熱に。また痔出血にも効く。

・スイカズラ(忍冬)どこにもある蔓植物。茎葉は口内炎、扁桃炎に卓効がある。花は解熱によく、浴湯料として全草を用いる。

にこの辺にはシロバナ、キバナもある。花時の地上部を強壯強精薬とする。

・ウスバサイシン(細辛)根茎が口内炎に効く。大町以北に多い。ヒメギフ蝶の食草。

・ウツボグサ(夏枯草)花穂は利尿薬として有名。腎臓炎、膀胱炎、口内炎等によい。

・オオバコ(車前草)全草が咳の特効薬である。サボニンを含まないので安全である。

・オケラ(蒼朮)健胃薬として根を使う。

・オトギリソウ(小連翹)全草を切り傷に用いる。止血、殺菌作用にすぐれる。

・カキドウシ(連銭草)何所にもある草であるが、糖尿病の特効薬である。とくにタラ根皮と併用すると一層効きめがよくなる。

・カワラヨモギ(茵陳蒿)高瀬川原に多い。花穂を肝臓の特効薬とする。

・キンミズヒキ(竜牙草)全草を下痢、口内炎、やけど、かぶれに用いる。

・キハダ(黄柏)鮮黄色の内皮は健胃、下痢止め、二日酔に卓効がある。

・センブリ(当薬)全草を健胃、胃痛、食欲不振に活用する。最近めっきり減少した。

・タラノキ(樛木)根皮は糖尿病の妙薬として知られる。連銭草併用が一層効果的。

・ツリガネニンジン(沙参)根にサボニンを含むので、咳止め、痰切りに効果がある。

・トチバニンジン(竹節人參)苦味健胃、解熱、去痰によい。大町以北に多産する。

・ナルコユリ(黄精)根茎を滋養強壯に使う。

・ニワトコ(接骨木)茎葉は打ち身に。花は発汗解熱に効果がある。利尿にもよい。

・ヒキオコシ(延命草)この辺より北にはクロバナヒキオコシもあり、健胃剤として胃炎、胃アトニー、腹痛に卓効がある。

・マタタビ(木天蓼)虫コブのついた果実は冷え症の腹痛、腰痛などに効く。

・ワレモコウ(地榆)根茎が下痢、外傷の止血、やけどによく効く。

二、毒草

この辺にある毒草で特に注意すべきものをつぎに列挙する。

・ドクウツギ 紅熟する果実は、うまそうに見えるが誤食すると痺れんを起こし死ぬ。

・ドクゼリ セリと間違えないこと。誤食すると痺れん、呼吸困難を起こして死ぬ。

・フクジュソウ 正月の床飾りなどに珍重されるが誤食すると心臓がマヒし死に至る。

・ヤマトリカブト 山菜のニンリソウと誤食した人が死んだ例が昨年山形県であった。

・スズラン 強力な強心作用をもち誤食すると心不全を起こして死ぬこともある。

・ハシリドコロ 若苗は山菜と間違われやすい。誤食すると狂騒状態となり走り廻る。

・バイケイソウ 山菜のギボシ類と間違え誤食すると激しい嘔吐にみまわれる。

・ウマノアシガタ、キツネノボタン 何れも誤食すると口内、胃腸など消化管がただれて血便を出す。

・トウダイグサ この仲間のみな有毒。ナツトウダイ、ノウルシなどもこの辺に多い。



スイカズラ

・ヤマウルシ、ツタウルシ 何れも樹液により皮膚に炎症をおこす。

・レンゲツツジ 安曇野では鬼ツツジと呼んで注意を喚起している。牛馬も食べないので牧場に残り、ツツジの名勝地を造る。

以上のほか身近な毒草として、死ぬことはないが誤食すると中毒を起こすものとして、ヒヨウタンボク、オシダ、クサノオウ、クハラ、タケニグサ、テンナンシヨウ類、ミズバシヨウ、エンレイソウ などがあ

(大町山岳博物館 囑託)

山と博物館 第29巻 第6号

発行所 長野県大町市 TEL220211

印刷所 大町山岳博物館

定価 年額1,200円(送料共(切手不可))

郵便振替口座番号(長野)13393